「佐野正隆作曲作品コンサート　for　Guitar “Cool Earth”」
さいたま芸術劇場　平成19年12月16日（日）に開催されました。

「火神鳴」の演奏。火神鳴とは、雨が降っていないのになっている雷のことで、雷の情景と戦争のイメージをダブらせた曲。

チャリティーコンサートで地球環境問題を考える

「音楽家」＝「自然環境のメッセンジャー」の一人として伝えたいこと

ギタリスト、作曲家：佐野正隆氏インタビュー

最近、チャリティーコンサートを通じた地球環境基金への寄付が増えています。その一例として、収益の一部をご寄付いただいた「佐野正隆作曲作品コンサート for Guitar “Cool Earth”」の代表：佐野正隆氏にお話を伺いました。

今回のコンサートの特徴は？

「地球温暖化防止」を目的に、環境問題をテーマにしたクラシックギターの作品などを演奏して、チケットやCDなどの売り上げの一部を地球環境基金に寄付させていただきました。

自分で作曲したギターの独奏、重奏、合奏のオリジナル作品のみを披露したのですが、**一ギタリストの作曲作品だけのコンサートを開催するのは、日本のクラッシックギター界ではおそらく今回が初めての試みだと思います。**

コンサートの最後には、佐野ギター教室の門下生80人編成で「火神鳴」（ひかみなり）という曲を演奏しました。この曲は、日本ギター合奏連盟平成17年度の委嘱作品で、終戦60周年に想いを寄せ、悲惨な戦争が二度と起きないことを願って作曲したのですが、ほかに例を見ない大人数での演奏になりました。通常アンサンブルといったらせいぜい10人程度ですから。出演者が大勢なので、20～30名ずつに分かれて1年がかりで練習を重ねました。

佐野さんが環境問題をテーマにした曲作りを始めたいきさつとその代表作について教えてください。

テレビなどの情報で環境問題の話題を耳にしない日はないですよね。私は作曲をしているので、作品のテーマとなる自然や環境のことには人一倍関心が高くなるのだと思います。

環境問題を意識して作った曲には、例えば今回演奏した「木霊（こだま）の祈り」があります。木霊とは木に宿る精霊のことで、この作品では木霊の人類に対する嘆きや憤り、そして警告、最後には何とかして欲しいという祈りを即興的に書きました。

イメージしたのは、ギター用材として最高級素材のブラジリアン・ローズウッド、いわゆるハカランダという木。今、この木はほとんどなくなってしまっていて、ワシントン条約の対象になっているので、伐採もできなければもちろん輸入もできない（コラム①）。この木がギターの素材に一番適しているのに、今はもう使えないのです。このハカランダも含めて、すべての木が「瀕死の現状を何とかしてくださいよ」という祈りを捧げている、そういう曲です。

また、これも今回の演奏曲のひとつで、温暖化に歯止めをかけたいと願って作った「クールアース」という作品があります。美しい地球がだんだんと変わっていく様を単純な音の流れで表現し、最後には平和な状態を取り戻すため、そういう安らぎ感で終わるように作られた曲です。

チャリティーコンサートを開こうと思ったのはなぜですか？

音楽家もそうですが、**多くの人を集めて何かをする職業の人は、自分の本来の仕事に加えて社会的な役割を担っていくことが大事だと思っています。**

今回のコンサートのことは、2年近く前からやりたいという想いを温めてきました。より多くの人に想いを伝えるためには、やはりチケットの金額も手ごろなチャリティーがいいと。

普通のコンサートですと、お客さんはギター関係者が多いのですが、今回はギターをやっていない方や一般の方が結構多く聴きに来てくれたので嬉しかったですね。

演奏は曲によって、プロのソロギタリストや4人編成のカルテット、10名編成のアンサンブルのほかに、佐野ギター教室の生徒たちが出演し、全14曲を演奏披露しました。

正直、出演者は演奏のことで精一杯で、チャリティーのことまでは意識する余裕もなかったようですが、たくさんのスタッフに支えられて、成し遂げることができました。

コンサートではどんなお話をなさったのですか？

テレビで知って驚いた「待機電力」の話をしました。テレビのパワーランプやコンセントプラグに刺さったまま流れている微量電力のことです。もし日本の全家庭でこれをカットしたら、日本の原子力発電所が3つ分減るというのです。

また、一番反応があったのが、地球を一つの生命体に例えた話。地球が一つの生命体だと仮定すると、生物はすべて一つの小さな細胞で、人間は地球のガン細胞になっているのではないかと。要するに、地球を壊しているわけです。

だから地球という体がガン細胞を除去しようとする。それが異常気象となったりして、邪魔な人間を地球が排除しようとしているのではないか、と感じていることをお伝えしたのです。

インパクトがあったためか、その話を聞いて環境問題の現状を意識してくださった方が多かったようです。

環境問題への気付きを呼びかける上で、音楽が果たしうる役割やパワーについてお聞かせ願えませんか。

もともと音は人間よりも先に存在していて、地球が出来たときに既にあったものです。物質を叩くと音がしますよね。そのなかに、例えばドミソなどの音が入っていて、音階が生まれたのです。「水琴窟」（すいきんくつ）をご存知ですか？人間が地中に甕（かめ）を埋めて水音を楽しむものですが、これはもともとは自然のもので、水の滴るポトっという音がきれいだったので、人工的に再現したものです（コラム②）。

また、ベートーベンのようにウイーンの森の鳥のさえずりを、ビバルディのようにせせらぎの音をそのまま楽譜にして、自然の音を取り込んだ曲もありますよね。

つまり、音楽は「最初に音ありき」みたいなところがあるのです。自然からの恩恵ともいえるもので、それをまた人間が自然や環境というテーマで再現したり、曲にして自然に返してあげるような、音楽家にはそういうメッセンジャー的な役割があると思うのです。

佐野氏指揮による「水神」の演奏。第二楽章には、インタビューにも登場する「水琴窟」というタイトルがつけられている。

なるほど。「環境」を広い視野で捉えて、いろいろな職業の方が自然との関わりや環境問題を意識してアピールしてくだされば、一般の人たちにも抵抗なく受け入れてもらえるのかも知れませんね。

音楽家も含め、いわゆるメジャーな方々には、ぜひ自分の使命を意識して、環境問題にも関心をもって呼びかけていただきたいと思うのです。今後、機会があれば引き続き私も協力させていただきますが、そういうメジャーな方たちが地球環境基金に関心をもってくれると良いですよね。私も折に触れて、知り合いのアーティストに協力のお願いをしてみたいと思います。

心強い励ましの言葉、ありがとうございました！佐野さんの今後ますますのご活躍を期待しております。

コラム①　―「ハカランダ」と「ワシントン条約」―

ハカランダは、1960年代までは上質な素材として、家具や楽器などに多用されていた。高級ギターの裏板・横板にも使われていたが、大量伐採の結果、ワシントン条約（「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」）に指定されるまでに激減。今は、原木での輸出は一切禁止され、加工品も輸出入国の許可証がないと取引できない希少材となっている。現在、ギターの素材としては、マツ・スギ・黒檀・メイプル・シダー・マホガニー・ローズウッドなどの木材が使われる。

コラム②　― 大自然の音響装置「水琴窟」―

地中に逆さに埋められた甕に落ちる水滴の音が琴に似ていることが名前の由来と言われる「水琴窟」。その構造は独特で、甕の上の鉢から溢れた水やそこで手を清めた後の水を利用して、音を生み出す仕組みになっている。江戸時代中期より作られたとされ、風や水の音に興じる日本の文化的背景から昭和初期頃まで全国各地で造られた。

CD アルバム
「SAUDADE」

佐野正隆（さのまさたか）氏

●プロフィール

佐野ギターサロンメヌエット主宰
社団法人：日本ギター連盟正会員
日本ギター合奏連盟常任理事

ギタリストとしてだけでなく、作曲、編曲、指揮の分野においても活躍。編曲においては300曲以上をアレンジ。ギター独奏CD、ギターアンサンブルCD、ギター作品集など多数発行。